

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

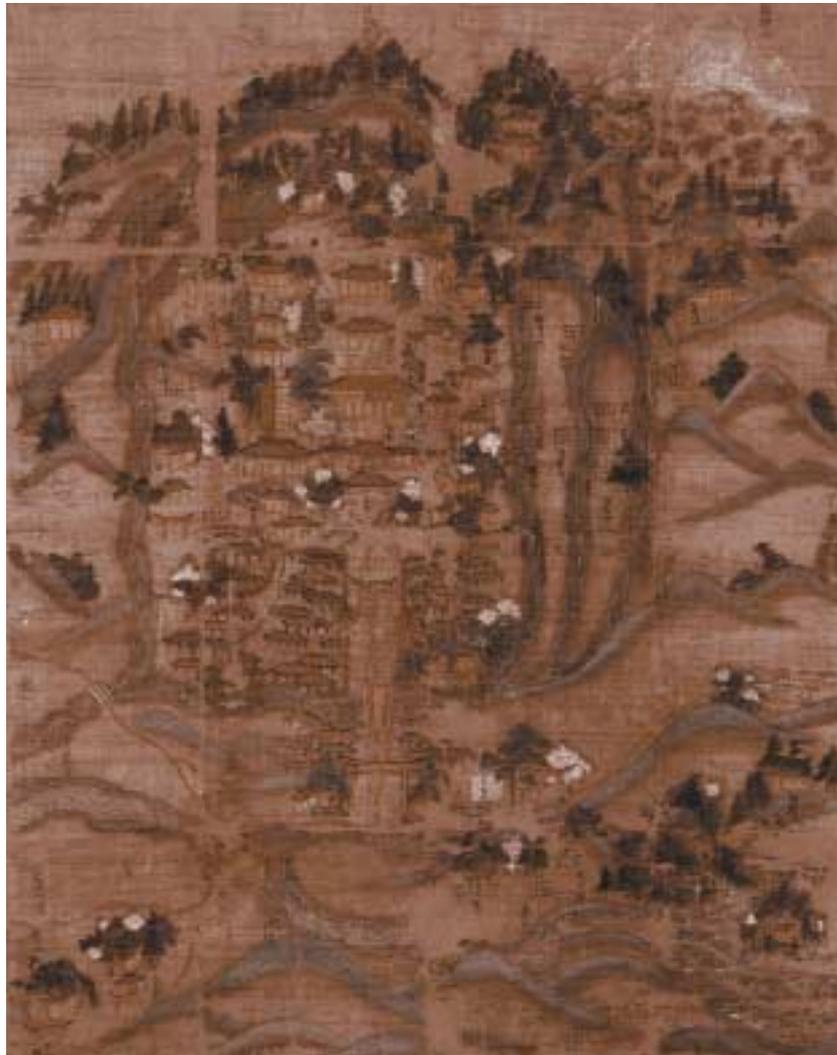
URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

77

中世の恵日寺

会津仏教文化の再興

福島県立博物館



絹本著色恵日寺絵図（恵日寺蔵・当館寄託）

今年二月二六日の新聞に、国指定史跡「慧日寺跡」に金堂が復元されるといふ記事が載りました。福島県磐梯町によれば復元は今年度から三カ年計画で実施され、金堂が復元されるのは全国で初めてだそうです。これ程紙面を賑わせた「慧日寺」とはどのようなお寺であったのでしょうか。

平安時代初め、法相宗の僧、徳一が、都の喧噪を離れ閑寂たる地に修行の場を求めてこの会津にやって来ました。粗末な法衣を纏いながら人びとに仏教の教えを広めたといわれます。このことは鎌倉時代末に書かれた『元亨釈書』などに書かれています。また真言宗を開いた空海が弘仁六（八一五）年に徳一に宛てた手紙が伝わっており、空海は彼を「菩薩」と称して、民衆教化を行う姿勢を高く評価しています。さらに天台宗を開いた最澄が著した『守護国界章』などから彼と徳一との間で、教理上の論争（三一権実論争）があったことが分かります。

このように空海や最澄と関わりがあった徳一が開いた寺院が「慧日寺」なのです。現在も発掘調査が続けられており、徳一の時代の建物跡や土器などが発見されています。ところがその後の恵日寺（史跡としては「慧」字が使用されています）の様子については、はっきりしたことは分かっていません。何度かの火災にあって現在建物などは残っていません。わずかに『源平盛衰記』や『平家物語』に寿永元（一一八二）年横田河原の戦いで、城四郎が会津四郡の兵を率いて参戦する様子が記され、そこに会津乗丹坊なる僧が登場します。江戸時代に書かれた『会津旧事雑考』や『恵日寺縁起』などでは彼が恵日寺の衆徒を率いて戦ったことが記されており、この頃の恵日寺勢力が源平合戦に関わったことが分かるのみです。

ところで写真Ⅰを見て下さい。密教の儀式で使われる十二天図のうちの毘沙門天像です。表面の剥落が激しいものの、室町時代の作品です。現在当館が所有しているものですが、以前修復が行われ、その際軸も交換されました。それが写真Ⅱです。ここには「大寺」と記されています。また「玄弘」という戦国時代の恵日寺住職の名前も見られ、これが恵日寺の什物だったことがわかります。実はこれだけではありません。現在は会津若松市の観音寺が所有している仏涅槃図（写真Ⅲ）にも同じような書き込みが見られます。

では当時の恵日寺はどのような様子だったのでしょうか。明治期に復興成った現代の恵日寺にはいくつもの堂宇が描かれた絵図（表紙写真）が残されています。表現技法などから南北朝から室町時代頃に描かれたものであることが分かります。また絵の裏書き

夏の収蔵資料品展

中世の恵日寺

会津仏教文化の再興

●会期 平成17年7月16日(土) - 8月21日(日)



写真 毘沙門天像（十二天図のうち・館蔵）

から永正八（二五二二）年に高野山で修理された恵日寺の什物であることが分かります。さらに現在発掘されている遺構が、絵図に描かれた堂塔と重なる部分が多くあると指摘されています。特に絵図の徳一の墓とされる石塔が、史跡内に現存しており（写真Ⅳ）、形状や出土遺物から平安中期のものであると判断されています。

ところが絵図は自ら何も語ってはいけません。そこで今回の展覧会では、じっくりと絵図が語りかけてくれる囁きに耳を傾けてみようと思います。どんな言葉が聞こえてくるのか。様々な手がかりをもとにじっくりと考えてみませんか。

会津は仏教文化の宝庫です。その礎を築いた徳一。彼の開いた磐梯山恵日寺。そのお寺を知ること、この地に広がる古寺・古仏を理解するきっかけにしてみたいかがでしょうか。

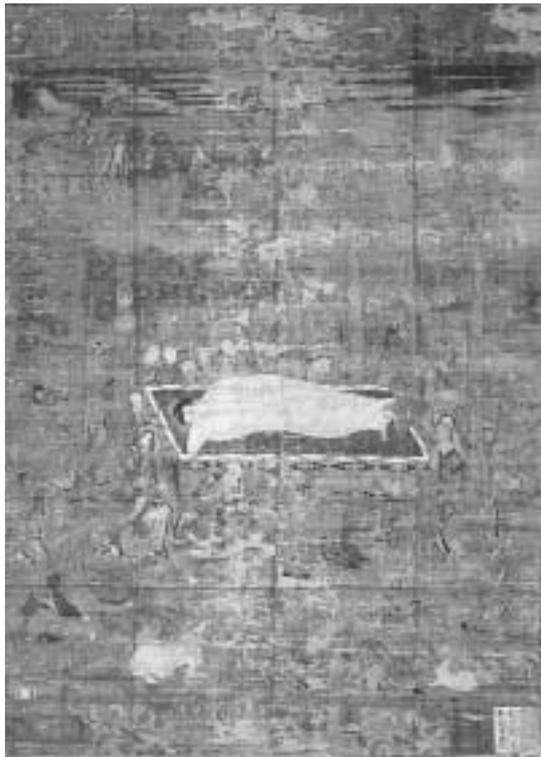


写真 仏涅槃図（観音寺蔵・当館寄託）



写真 伝徳一廟塔

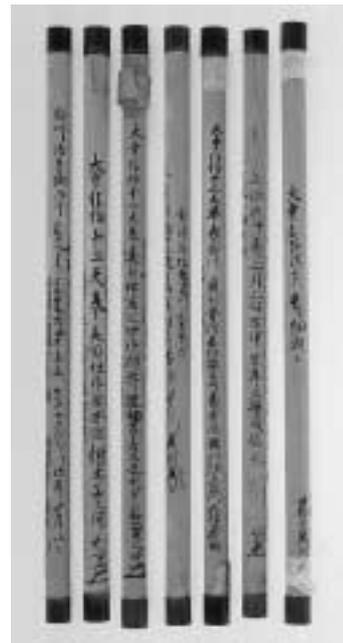


写真 十二天図の軸（館蔵）

夏の収蔵資料品展《中世の恵日寺 会津仏教文化の再興》は平成一七年七月一六日（土）から八月二二日（日）まで開催しています。観覧料 常設展観覧料で観いただけます。

企画展「若い」関連事業

四月(三日)(土)

記念講演会「パフォーマンス

「老人介護とアートの力」

講師 折元立身 氏

企画展「若い」開催初日は、アーティスト折元立身さんの講演とパフォーマンスで始まりました。

年離れた母男代さんとの協同によるパフォーマンスアート「アトママ」シリーズで国際的に知られる折元さんですが、多忙な中、作品のご出品だけでなく、パフォーマンスも行っていただきました。

巨大な男代さんの垂れ幕が下がるエントランスホールに「アトママ」の移動式ホット美術館を抱えて現れた折元さんに、修学旅行生はびっくり。お母さんと遊びに来ていた子供たちはビッグシューズを履いて歩き、ご満悦の様子でした。

視聴覚室で行った講演会も満員で、熱く自分のアートを語る折元節にみなさん引き込まれていました。講演後にはパフォーマンス「ブレッドマン」が行われ、最後にサイン入りブレッドを手にしたラッキーな方もいらっしゃいました。

最初から最後まで人間的な温かさにあふれたイベントでした。

四月(四日)(日)

記念講演会「神と翁」

講師 山折哲雄 氏

司会 館長 赤坂憲雄

「若い」展二日目は、宗教学者の山折哲雄先生をお招きし、「神と翁」を演題にご講演いただきました。

日本の神々はなぜ老人の姿で現れると信じられてきたのでしょうか。先生は「人間のライフステージで一番神に近い姿が老人だから」とその理由をあげ、中国の不老長寿、キリスト教の不死の神の思想とは異なり、死を肯定し、死を媒介にして「翁」の思想が生まれたと、日本の「翁」の特質を説明してくださいました。

老人を尊重する思想は十五世紀に世阿弥によって大成された能楽の「翁」によって芸術へと昇華しクライマックスを迎えました。しかし、現在はどのようなでしょう。「千年の歴史において社会のシテ(主人公)であった老人は、現在は弱者であり、救済されるべき存在とされているのではないかと先生は疑問を投げかけられました。

また、男性は老いて「翁」という神的存在になるのに、女性には「翁」に相当する存在はないのだからかという疑問にも、「翁」の面は、「男女両者の成熟したものではないか。男でも女

でもない男女を超越したものであるのか」と、心理学者のユングの言葉、男は女性的なものを、女は男性的なものを獲得していく」を引いて先生は答えてくださいました。

最後に、これからの高齢化社会を生きる心構えに話題は移り、「人生が五〇年だった時代の死生観では、一仕事終えたら、死を迎えた。今は人生八〇年の時代、一仕事の後に老・病・死を見つめる時代」と現代社会を表現されました。

「老・病・死にじっくり向き合わなければならぬ現代は、決して楽観的な時代ではありません」とされながら、生きるヒントとして古代インド人の考えた人生の四つのステージの考え方をご紹介いただきました。

その第三ステージは林住期と呼ばれ好きな仕事に費やす時期です。「この林住期をいかに生きるか」という言葉は、山折先生から聴講者への力強いメッセージとなりました。

五月(一日)(日)

記念公演「古典芸能に見る

老いの姿」

講師 会津能楽会・

やなぎみわ氏

会津地域の能楽愛好者で構成される会津能楽会の当館での公

演が実現し、この日、会場のエントランスホールには二〇〇人を超えるお客様がお見えになりました。安達が原の鬼婆をテーマにした「黒塚」の迫力ある演技に大きな拍手が送られました。

なお、この公演は会津能楽会の会員の方々のボランティアに近い協力により実現しました。あらためてこの場で御礼申し上げます。

後半は、現代日本を代表するアーティストやなぎみわさんが、国内では初めて日本舞踊を披露してくださいました。

代表作グランドマザーズシリーズで、老いの表現を追求しているやなぎさんが自ら老女に扮して舞ったのは「関寺小町」。絶世の美女と謳われた小野小町の老残の姿を描く、物悲しくも美しい舞踊です。短い舞踊でしたが、やなぎさんの静かな熱演に観客の皆さんも引き込まれているようでした。

五月(六日)(金)

記念講演会「若い力」

講師 玄侑宗久 氏

司会 館長 赤坂憲雄

芥川賞作家で三春の福聚寺の現役の僧侶である玄侑宗久さんは、「雪村展」に続き当館での二度目のご講演を引き受けてくださいました。

お願いした演題は「若い力」でしたが、お父様のバイク事故とその後の想像を超える回復のお話を皮切りに、仏教思想はもろろん、物理学、心理学、脳科学と多岐にわたる話題が次々に飛び出しました。

それぞれのお話を興味深く聴くうちに、やがて「若い力」を信じるようになる自分にみなさん気づいたのではないのでしょうか。

平日にも関わらず会場はたくさんのお客様で埋まり、相変わらずの玄侑さん人気を確かめることになりました。

五月(八日)(日)

友の会主催映画上映会

恩地日出夫監督作品「蕨野行」

解説 館長 赤坂憲雄

「姥捨」をテーマにした名作映画はいくつか制作されていますが、「蕨野行」はその最も新しい作品です。ロケ地となった山形県の美しい風景、市原悦子の熱演、村田喜代子の原作にもとづく独特の語り口は皆さんの目にどのように映ったでしょうか。

「姥捨」というテーマに「悲しくなった」が、赤坂館長の解説により、気持ちがあ楽になったという方もいらっしゃいました。

鶴ヶ城の外来種

古川 裕司 自然担当

昨年から今年にかけてマスコミで、六月から施行された「外来生物法」が話題になっていきます。特に環境相の一言で、いったんは外れたオオクチバスが候補リストに盛り込まれたことが反響をよんでいます。

さて、外来種という自らやってきたような語感がありますが、実際は人為的に持ち込まれた生き物たちです。私個人としては、移入種という言葉を使いたいのですが、移入という言葉が、生態学で個体群の自然分布拡大にも使われるため、外来種といったほうが明確だそうです。

鶴ヶ城の野鳥を中心にした自然観察の記録を、きちんととるようになって、一三年以上が過ぎました。その間に記録した外来種は五六種になります(一覽参照)。各分野の専門家の人たちが、調査されれば、もっと多くの外来種が確認されると思われま

す。外来種の問題は、それによって国内の在来種や固有種の生態系が、望ましくない方向に向かうことにあります。しかも、それが人為的になされていることが、生物の多様性を

おびやかしています。九月(二四日(土)午後一時半から、自然史講座「鶴ヶ城の外来種(野外)を行います。実際に外来種を見ながら、この問題について考えるきっかけになればと思います。



鶴ヶ城のオオクチバス

鶴ヶ城の外来種

1992~2004年の観察記録による

科名	和名	確認年代(全国)	原産地	鶴ヶ城での観察時期
ジャコウネコ科	ハクビシン		東南アジア、中国、台湾	目撃情報
ネコ科	ネコ			
カモ科	アイガモ(飼育の放棄による放鳥)			通年
ハト科	カワラバト(ドバト)	鎌倉時代	アフリカ北部~中国	4・8・9月
ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	1960年代	米南部~メキシコ北東部	3~11月
アカガエル科	ウシガエル	1918年	米東部中部、カナダ南東部	3~10月
コイ科	ソウギョ	1878年	アジア大陸東部	1月を除き通年
カダヤシ科	カダヤシ	1916年	北米~メキシコ北部	4月
サンフィッシュ科	オオクチバス(ブラックバス)	1925年(1970年代に拡大)	北米	1, 3, 7月を除き通年
タイワンドジョウ科	カムルチー(ライギョ)	1923年(1960年代までに拡大)	中国大陸及び朝鮮半島	4~7月、9・10月
アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ	1920~30年頃	米南部	5・6・9月
ヒトリガ科	アメリカシロヒトリ	敗戦直後	北米	8・9月に幼虫
シロチョウ科	モンシロチョウ	縄文時代の終わり	アジア大陸から	4~11月
ミツバチ科	セイヨウミツバチ	1876年	欧州	8月を除き3~11月
タデ科	オオケタデ		中国~インド	8・9月
ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	明治時代	北米	6~12月
ナデシコ科	ノミノツツリ		欧州	5・8月
アカザ科	アカザ		中国	8・9月
アカザ科	コアカザ		ユーラシア(広域)	10月
スイレン科	ハス		中国・インド	6~10月
アブラナ科	マメゲンバイナズナ	1892年前後	北米	5~1月
マメ科	ハリエンジュ(ニセアカシア)	1877年頃	北米	5~6月
マメ科	コメツブツメクサ	明治時代	欧州~西アジア	6月
マメ科	ムラサキツメクサ	1868年前後	欧州	5~12月
マメ科	シロツメクサ	江戸時代	欧州	5~12月
トウダイグサ科	コニシキソウ	1887年頃	北米	7~12月
アオイ科	タチアオイ	栽培逸出	中国	6~8月
アオイ科	ゼニアオイ	江戸時代	欧州	5~8月
アカバナ科	メマツヨイグサ	明治時代	北米	6~11月
ヒルガオ科	マルバルコウソウ	江戸時代	熱帯米	8~10月
ムラサキ科	コンフリー	明治時代	欧州	5~6・9月
シソ科	ヒメオドリコソウ	1893年	欧州	12~6月
ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ	1870年頃	ユーラシア(広域)	4~5月
ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ	1870年頃	ユーラシア(広域)	通年
オオバコ科	ヘラオオバコ	江戸時代末期	欧州	5~6月
キク科	オオブタクサ	1953年以前	北米	9~10月
キク科	アメリカセンダングサ	1920年	北米	7・9~12月
キク科	モクシュンギク(マーガレット)		カナリー島	5~12月
キク科	オオアレチノギク	1920年前後	南米	7~1月
キク科	ハルジオン	1920年頃	北米	4~6月
キク科	ハキダメギク	1932年	北米・熱帯米	8~9月・12月
キク科	クワイモ	江戸時代末期	アメリカ大陸	9~11月
キク科	ブタナ	1933年	欧州	6・9月
キク科	ノボロギク	1870年前後	欧州	通年
キク科	セイタカアワダチソウ	1908年頃	北米	10~1月
キク科	オニノゲシ	明治時代	欧州	4~1月
キク科	ヒメジョオン	江戸時代末期	欧州・北米?	6~1月
キク科	外来種タンポポ	1904年以前	欧州	通年
ヒガンバナ科	ラッパズイセン	栽培逸出	欧州	4月
アヤメ科	キシウブ	1896年頃	ユーラシア(広域)	4~7月
アヤメ科	ヒメヒオウギズイセン	1890年頃		7~8月
ツユクサ科	ムラサキツユクサ	1870年頃	北米	6月
イネ科	イヌムギ	明治時代初期	南米	5~8月
イネ科	カモガヤ	江戸時代末期	欧州~西アジア	5~9月
イネ科	オニウシノケグサ	昭和	ユーラシア(広域)	5月
イネ科	ナガハグサ	明治時代初期	ユーラシア(広域)	5~8月

ほ乳類2種 鳥類2種 昆虫類1種 両生類1種 魚類4種 昆虫3種 その他1種 植物42種 計56種
 (クサガメ、スッポンは外来種の可能性もあるが含めなかった)
 確認年代および原産地は「外来種ハンドブック」(日本生態学会編・地人書館)等より引用。植物の観察時期は花期。

Q：知り合いから綿の種を分けていただきました。綿といえは暖かい地方の植物だと思のですが、福島県、とくに会津地方でも育つのでしょうか。麻やカラムシが有名ですが、綿の栽培事情はどうだったのでしょうか。またいつころから栽培されていたのでしょうか。

A：会津でも綿は育ちます。鉢植えで楽しんでいる方もいらつしやいます。さて、いつころからかという質問に正確に答えるのはなかなか難しいかもしれませんが、栽培していたということの手がかりとなるのは現在の会津若松市幕内の肝煎、佐瀬与治右衛門の著した『会津農書』（貞享元年一六八四）です。下巻にはいろんな畑作物の例が上げられています。麻、カラムシ、藍、紅花など繊維や染料の原料となる植物についても細かく記述さ

綿の道具



Q：そうすると会津地方は綿の産地だったのですか。

A：かつては若松周辺の比較的温暖な地域で栽培されていたようですが、『会津坂下町史民俗編』によると、明治になって外国からの安い輸入綿が多く入るようになって姿を消してしまつたようです。それが第二次世界大戦中やその後の衣料品不足の中で復活したのです。この時期は農家で綿羊を飼つて羊毛を刈り取り、セーターなどを編んだということもありました。

Q：実つた綿から種をどうやって取り除くのですか。

A：種を取る作業のことを綿繰りともいいます。手で種を引きちぎろうとしても簡単にはがすことはできません。ここで使うのが種取り機なのです。構造は単純です。二本の木製ローラーの間に綿の実を通すと、繊維は向こう

れています。この中に綿も登場します。「種は（旧）三月の土用が終つたころに蒔くとよく実が入つて目方も重くなるので、種をとらずにそのままで売るといい。寒があけた後の九十五日あたり蒔くとよい綿ができるが、目方が軽くなるので、売らずに自家用にするのがいい。一反でよくとれるときで三貫目、中くらいで二貫目である。一反の労力は延べ二十二人になる。」と書かれています。内容はなかなか具体的で、さすが『会津農書』です。確かに会津地方は冬には多くの雪が降る雪国ですが、夏にはぐつと気温が上がります。数年前の冷害のときも会津の盆地での米の収穫はそれほどの影響は受けませんでした。

側に、種はこちら側にと分かれるというのです。県内各地で製作されていたようで、当館には塩川で作られたものなど数点が収蔵されています。ローラーには固い木を使い、上下二本のローラーが連動する部分はらせん状にねじが切つてあります。この部分がつまみ動きしかも噛みあい外れないようにトリモチを油でのばして付けるということもしたようです。

Q：そのあとにいよいよ糸紡ぎになるのですか。

A：いえ、まだその前に繊維をそろえる工程が入ります。普通は綿屋さんなどへお願いするところですが、以前は弓という道具を使って、繊維を弾き飛ばしてほぐし、方向をそろえるのです。こうしないとうまく紡ぐことができないのです。このあとに、いよいよ糸車での糸紡ぎにな

ります。糸紡ぎとは、綿の短い繊維を回転させ、絡み合わせることです。糸車の回転と綿の引き出しの速度がちよとどびつたりになると、スムーズに糸にすることができません。

Q：会津の地元産の綿が実る姿はもう見ることはできないのでしょうか。

A：それぞれの地方の綿を地綿といいます。白のほか茶色の綿があつたりします。外国産よりも繊維が短いようです。その会津の地綿を再び実らせようという動きがあるようです。会津木綿や青木綿といえは、有名な木綿の綿の織物です。それが原材料からできた素晴らしいことです。復活するようないことがあつたらぜひ応援したいものです。



綿繰り機



製作者の焼印

トピックス

福島県立博物館移動展「みる・さわる・世界の化石」

みなさんのお近くで博物館の収蔵品を紹介する移動展も四回目になります。今回は自然分野が担当し、梁川町にうかがいます。

梁川町は、広瀬川河床から、海獣バレオパラドキシアの化石が発見され有名ですが、移動展では、バレオパラドキシアの実物の標本や全身骨格復元模型を展示します。また、今回は大きなふたつのコーナーを設けて、各時代の世界じゅうの化石を紹介します。

「みるコーナー」では、マンモスや恐竜、アンモナイト、三葉虫などを展示し、「さわるコーナー」では、実際に、恐竜の大腿骨や歯、卵の殻、糞などの化石や、いろいろな種類のアンモナイトや三葉虫の化石も手にすることができます。

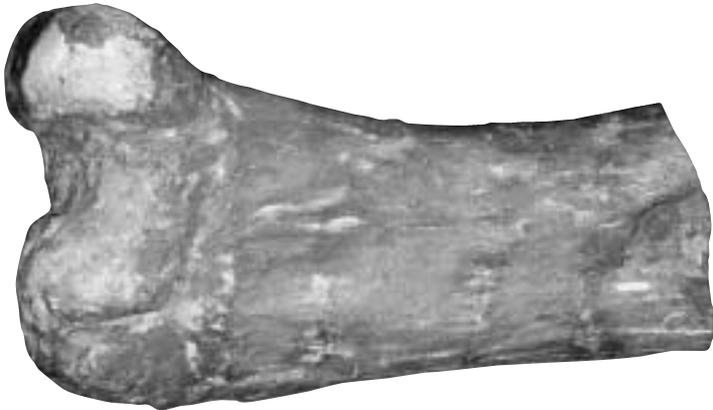
関連行事も準備しており、実際に化石を採取して、標本にする講座もあります。暑くて長い夏休みに、ぜひ、移動展「みる・さわる・世界の化石」においていただき、太古の生き物たちに思いをさせ、地球の歴史を考えていただければと思います。

会期 七月九日(土)～八月二日(日)
会場 梁川町民美術館

〒九六〇 〇七八二 梁川町字中町一〇番地
TEL・FAX 〇二四 五二七 二六五六
休館日 毎週月曜日(七月一八日は開館)・七月一九日
観覧無料 開館時間は九時半～一七時(最終入館一六時半)
関連行事 展示解説日 七月二三日(水)～二四日(木)
午前一〇時半～午後三時半

自然史講座「化石をさがそう」
八月六日(土)午後一時半 梁川町広瀬川河床
自然史講座「化石標本をつくろう」
八月七日(日)午前九時半

展示解説会 八月七日(日)午後一時半
自然史講座の申込みや行事の詳細は、梁川町教育委員会生涯学習課 TEL 〇二四 五七七 七二〇〇



「さわるコーナー」のカマラサウルス大腿骨

秋の企画展予告

婚礼

— ニッポンブライダル考

初婚年齢がどんどん上がり、負け犬の数も増加中の昨今ですが、独身男女のうち結婚したい人の割合は八〇%から九〇%という高い数値を示しています。それは複雑化している現代の結婚事情にあっても、結婚への憧れ、婚礼の幸福のイメージがなお強くもたれていること、表れでしょうか。

この展覧会では、江戸時代のお姫様の婚礼調度から最近のウェディングドレスまで日本の婚礼・結婚に関する資料を一堂に会して、その意味や内容の変遷を追ってみます。婚礼衣装やアクセサリー、婚礼の場を飾る装飾品、客人をもてなす料理に器など、各時代や地域によって内容が異なる婚礼は、花嫁花婿が属する文化が凝縮された形です。形は違えど昔も今も華やかな婚礼文化に「つつと」でも結婚して「何だろっ」と思っていただけだからと思います。



ウェディングドレス「ローズユミ」
(ユミカツラインターナショナル蔵)

秋の企画展《婚礼 ニッポンブライダル考》は平成一七年九月三日(金・祝)から一日(日)まで
企画展観覧料 一般・大学生五〇〇円/高校生三〇〇円/小・中学生二〇〇円

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「おもしろマナー・ヒストリー」
 和同開珎から野口英世まで
 会期 六月二五日(土)から 八月二八日(日)まで
 「画題で見る美術 吉祥 福を授ける人々」
 会期 九月三日(土)から 一〇月一〇日(月)・祝日まで

講演・講座

は要申込

体験講座
 「虫かきをつくろう」
 講師 技術伝承者 阿部吉致さん
 日時 七月九日(土)午後一時半～三時
 「昔話を語ろう」
 講師 語り部 横山幸子さん
 日時 八月七日(日)午前二〇時半～正午
 「草木染め①」
 講師 染織工芸家 山根正平さん・山根好子さん
 日時 八月二七日(土)午前二〇時～午後三時
 「草木染め②」
 講師 染織工芸家 山根正平さん・山根好子さん
 日時 八月二八日(日)午前二〇時～午後三時
 「おもちゃをつくろう」
 (ひんがしをひくひんがし)
 講師 展示解説員 丸山文子他
 日時 九月一〇日(土)午後一時半～三時半
 移動展示解説日(梁川町民美術館)
 「みる・さわる・世界の化石」
 講師 学芸員 竹谷陽二郎他
 日時 七月二三日(水・四日)木) 午前二〇時半～午後三時半
 自然史講座
 (申込は、梁川町教育委員会生涯学習課へ)
 「化石をさがそう」(野外)
 講師 学芸員 竹谷陽二郎他
 日時 八月六日(土)午後一時半～四時半
 「化石標本をつくろう」
 (梁川町農村環境改善センター)

講師 学芸員 相田 優他
 日時 八月七日(日)午前九時半～正午
 移動展示解説日(梁川町民美術館)
 「みる・さわる・世界の化石」
 講師 学芸員 古川裕司
 日時 八月七日(日)午後一時半～二時半
 自然史講座
 「鶴ヶ城の外來種」(野外)
 講師 学芸員 古川裕司
 日時 九月二四日(土)午後一時半～三時半
 収蔵資料品展開連講座
 「恵日寺と会津の仏教文化」
 講師 学芸課長 若林 繁
 日時 七月一六日(土)午後一時半～三時
 「史跡恵日寺を歩く」(野外)(磐梯町恵日寺)
 講師 学芸員 木田浩他
 日時 七月一七日(日)午前二〇時～正午
 収蔵資料品展開連講座
 「中世の恵日寺 会津仏教文化の再興」
 講師 学芸員 展示解説員
 日時 八月一六日(土)講座終了後
 八月一三日(土)午後一時半～二時半
 八月一五日(月)午後一時半～二時半
 八月二一日(日)午後一時半～二時半
 企画展関連行事
 企画展記念講演会「婚礼のマナー」(仮称)
 講師 林原美術館館長 熊倉功夫さん
 日時 九月二五日(日)午後一時半～三時
 美術講座
 「ぶくしまの手技に親しむ①」
 講師 喜多方染織グループ代表 冠木昭子さん他
 日時 八月六日(土)午後一時半～三時半
 「ぶくしまの手技に親しむ②」
 会津型紙でカレンダー作り(実技)
 講師 喜多方染織グループ代表 冠木昭子さん他
 日時 八月七日(日)午後一時半～三時半
 「暮らしの中の美術 人の一生④」
 講師 学芸員 川延安直・小林めぐみ
 日時 九月三〇日(金)午後一時半～三時半
 民俗講座
 「民俗映像を見る③ からむしと麻」
 (上映・解説会)
 講師 学芸員 鈴木克彦

日時 七月三日(土)午後一時半～三時
 「民俗映像を見る④ 茂庭のしなだ織」
 (上映・解説会)
 講師 学芸員 榎 陽介
 日時 八月二〇日(土)午後一時半～三時
 「カラムシ講座1」(見学会)(昭和村)
 講師 昭和村からむし生産技術保存協会
 日時 七月三一日(日)午前八時～午後五時
 「カラムシ講座2」(実技)
 講師 染織工芸家 日置 睦さん 他
 日時 九月四日(日)午後一時半～四時
 考古学講座
 「縄文土器をつくろう」(実技)
 講師 学芸員 森 幸彦・高橋 満
 日時 七月三日(日)午前二〇時～午後三時
 「縄文土器の野焼き」(野外)
 講師 学芸員 森 幸彦・高橋 満
 日時 八月二一日(日)午前二〇時～午後二時
 「大昔の生活を体験しよう」(野外)
 講師 学芸員 森 幸彦・高橋 満
 日時 八月二一日(日)午前二〇時～午後二時
 「原始機で布を織る」(実技)
 講師 学芸員 木本元治
 日時 九月一七日(土)午後一時半～三時
 保存科学講座
 「博物館ではどのように資料を保存しているのか 博物館における資料保存の状況を見る」(見学会)
 講師 学芸員 松田隆嗣
 日時 九月一八日(日)午後一時半～三時
 指導者向け研修講座
 「福島県立博物館研修講座」
 講師 学芸員 榎 陽介他
 日時 八月五日(金)午前九時半～午後四時

木曜の広場

講師 館長 赤坂 憲雄
 学芸員 佐々木長生
 場所 講堂 入場無料

会津学事始め 四季の祈りと暮らし
 第四回「七夕と盆行事」
 日時 七月二一日(木)午後一時半～三時
 第五回「磐梯山信仰と恵日寺」
 日時 八月一八日(木)午後一時半～三時
 第六回「飯豊山信仰と成人儀礼」
 日時 九月一五日(木)午後一時半～三時

実演

場所 体験学習室

「昔語り」
 語り部 横山幸子さん
 日時 七月一八日(月)・祝午前二〇時半～正午
 「機織り」
 講師 染織工芸家 山根正平さん
 日時 七月二四日(日)午後一時半～三時
 「紙芝居」
 講師 紙芝居作家 五十嵐邦子さん
 日時 八月一四日(日)午後一時半～三時
 伝統技術実演「三島の編組細工」
 講師 伝統技術保持者 五十嵐三美さん
 日時 九月一九日(月)・祝午後一時半～三時

やさしい展示解説会

* 展示解説員による常設展の案内です。
 * 毎週土曜日、日曜日の午前二〇時半～午後二時から四五分程度行います。
 * なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

* その他、行事等の詳細につきましては、月行事予定表やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

八月二二日(日) 県民の日)
 九月一九日(月) 敬老の日)

七月の休館日

七月 四日(月)・一日(月)・二九日(火)・二五日(月)
 八月 一日(月)・八日(月)・二二日(月)・二九日(月)
 九月 五日(月)・二二日(月)・二〇日(火)・二六日(月)

* 小・中学生、高校生は常設展を無料でご覧いただけます。